

成城大学本「拾遺百番歌合」翻刻

小島孝之
土井知子

一、「拾遺百番歌合」とは

『拾遺百番歌合』は『物語二百番歌合』と称される二百番歌合のうち、後に成立した百番の歌合である。先に成立したとされる百番は、左方に『源氏物語』の歌を、右方に『狭衣物語』の歌を配しているため、『源氏狭衣歌合』と呼ばれる。編纂者は定家自筆本『拾遺百番歌合』の奥書から藤原定家であると確認されている。その自筆本には前編に『百番歌合』、後編に『後百番歌合』と書名が記されているが、不都合が多いせいか、伝えられる過程で『源氏狭衣歌合』『拾遺百番歌合』とも呼ばれるようになったらしい。『拾遺百番歌合』は

左方に『源氏物語』の歌を、右方に十編の王朝物語の歌を結番している。次に詳細を記す。

『夜寝覚』	一番	二十番	二十首
『水濱松』	二十一番	三十五番	十五首
『参河仁左介留』	三十六番	五十番	十五首
『朝倉』	五十一番	六十三番	十三首
『袖奴良須』	六十四番	七十三番	十首
『心高幾』	七十四番	八十三番	十首
『取替波也』	八十四番	八十九番	六首
『露宿』	九十番	九十四番	五首
『末葉露』	九十五番	九十七番	三首
『海人苅藻』	九十八番	百番	三首

(物語名の表記は成城大学本による)

これら右方に取られている物語のうち、現存するのは『夜寝覚』『水濱松』の残欠本のみである。『海人苧藻』『取替波也』は改作が伝わっているが古本は失われており、他の六編にいたっては全く伝わっていない。そういった物語から歌を取り、

詞書をつけた『拾遺百番歌合』は、散逸した物語を復元する手がかりとなるのだ。また、『源氏物語』の本文研究においても重要視される。なぜなら『物語二百番歌合』は定家撰であり、定家自筆本も存在するため、『源氏物語』の写本として重宝されている青表紙本の親本の姿を知ることができるかもしれないからだ。『拾遺百番歌合』は自身に文学的価値があるだけでなく、散逸物語や源氏物語本文にも研究が及ぶ重要な資料ともいえるのである。

定家自筆本下冊(『後百番歌合』)の奥書には

此歌先年依後京極殿仰、給宣陽門院御本物語、所撰進也。私草被借失了。仍更求書写本、令書留之。

とあり、良経の命で宣陽門院から物語を借りて撰進した物語歌合の草稿本を人に貸したところ紛失されたので後に他から借りて書写した、ということがわかる。このときに、定家は訂正や改稿を施したらしく、現在伝本が二種に大別される。

すなわち、草稿本系統の前稿本と改訂版系統の後稿本である。成城大学本は内容の異同から前稿本に近いと思われるが、詳しくは次号に載せる。

二、書誌

〈装訂〉

卷子装。もと百番一巻であったものを、おそらく江戸時代に分割し二巻に仕立てたものであろう。そのため上巻は五十一番まで、下巻は五十二番からと半端なところで切れている。上巻の料紙は全長約十二米九十糎、下巻の料紙は全長約十四米九十八糎である。

〈大きさ〉

海松茶色地卍繁梅花文緞子表紙(約二十三糎)。これは後補と思われる。

〈表紙〉

金紙(約二十五糎)。

〈見返し〉

茶漆に螺鈿で花模様を描く。

〈軸〉

なし。

〈外題〉

上巻に「拾遺百番哥合」とある。下巻にはない。

〈内題〉

〈料紙〉

鳥の子紙。金銀の泥を用いて草花や網代など

の下絵や葦手絵が全巻に亘って描かれている。最後の方は息切れしたのか、色は金銀重ねではなく単色で絵も少なくなっていく。紙背は薄い紙で裏打ちされており、うっすらと銀泥で蝶、金泥で燕が描かれているのがわかる。

墨の上に泥が乗っている部分があることや、下絵の絵柄が江戸時代の奈良絵本にみられるものに類似することから、後書きと推察できる。

〈字面の高さ〉約二十一糎。

〈紙高〉紙高約二十六糎で、一紙の幅は約五十糎である。

〈奥書〉 這一巻為相卿御真蹟也

寛永十一曆

十二月上旬 古筆（「琴山」黒印）

了佐（花押）

と、初代古筆了佐の奥書極がついている。また為相の真筆とあるが、自筆の『古今和歌集』などと比較してみると同筆とはいえない。しかし、時代的には為相の生きた時代とそう

異ならない鎌倉時代中期の書の名手の手になる見事な筆跡である。

内径		外径		内箱	外箱
横	縦	高さ	横		
十・五	二十七・七	六・九	十二・五	二十九・七	三十一・八
十三	三十一・一	十一・一	十四・七		

（単位／糎）

内箱の蓋表には「拾遺百番／歌合二巻／為相筆」と定家風の筆で記されている。

三、翻刻にあたって

- ・ 上下巻の切れ目はとくに示さず、続けて翻刻する。
- ・ 新字体、旧字体、異体字の違いは含めない。
- ・ 七十二番の右の詞書「とけ□たき」は文意から「とけかたき」と思われるが、かすれてよく見えないため「□」を表

〈箱〉 桐の二重箱。大き

さは上の表を見よ。外箱の小口に紙を貼り付けて

「伝為相／あし手下絵／

拾遺百／番歌合」とあり、

元所蔵者名も「寮所蔵」

と赤で印字されている。

記する。

・異同や成立年代など、詳細は次号に載せる。

四、翻刻本文

拾遺百番哥合

左 源氏

右 夜寝覚 廿首

水濱松 十五首

参河仁左介留 十五首

朝倉 十三首

袖奴良須 十首

心高幾 十首

取替波也 六首

露宿 五首

末葉露 三首

海人荳藻 三首

一番 左源氏 右寝覚

左 すまのうらにしつみたまひしころ

八月十五夜くまなき月にむかひてみ

やこにとまり給し人々の御うへすき

にしかたのことかきつくしおほしいて、

六条院

みるほとそしはしなくさむめくりあはむ

月のみやこははるかなれとも

右 八月十五夜ゆめのうちにあたとせの秋

あまつをとめおりくたりて琵琶を、

しへけるをみとせといふとしの十五夜

あめふりそらくもりてゆめもみえず

なかもあかして

寝覚上

あまのはらくものかよひちとちてけり

月のみやこの人もとひこす

二番

左 たまかつらの内侍のかみたまくまいり

てやかていてはんへりけるに

冷泉院御製

こゝのへにかすみへたてはむめのはな

た、かはかりもにほひこしとや

右 中宮の御裳きの時御こしゆはせ給

とていてさせたまひてうへに御たい

めむありしにうちの御けしきおほ

しいて、

女院

きみによりくもゐの人のくもゐにて

こゝろもそらになすをみるかな

三番

左 あねの女君かくれてのち二条院にうつ

りたまはん事あすとて右大将宇治に

ものしたまへるにのきちかき紅梅のいろ

もかもいとなつかしきをうくひすたに

すきかたかくちなきてわたるにはる

やむかしのといと、こゝろにあまりて

兵部卿宮のうへ

みる人もあらしにまよふやまさにと

むかしおほゆるはなのかそする

右 ひろさわにひとりなかめてあねう

へもろともにおきふしなれにし

かたをおもひいて給にもはるやむかし

のとのみしのはれて

寝覚上

さきにはふはなもかすみも、ろともに

みしなからなるはるのあけほの

四番

左 兵部卿の宮はつせにまうて給宇治

の御なかやとりにあそひし給もの、ね

ともおひかせにふきくるひ、きを

き、て右大将のもとにつかはしける

第八親王

やまかせにかすみふきとくこゑはあれと

へたて、みゆるをちのしらなみ

右 はるのあけほの衛門督のうへもろと

もになかめあかして

寝覚のうへ

あさほらけうきみかすみにまかへつ、

いくたひはるのはなをみつらん

五番

左 弘徽殿のおほろ月夜の、ち右のおと、

のふちの宴におはして内侍のかみの

よりゐたまへるとくちにたつねより給て

あつさゆみいるさのやまにまとふかな

ほのみし月のかけやみゆると

右 九条のたひねの、ち後の宮にめし

いたされたるをねんころにかたらひ

つ、かの御ゆくゑたつねたまふ事たひ

かさなれはおもひわひて

女院新少将

こきかへりおなしみななどによるふねの

なきさをそれとしらすやありけん

六番

左 故院かくれさせたまひてのち麗景

殿の女御の御もとにまうて給へるに

のきちかき橋に郭公のなきければ

たちはなのかをなつかしみほと、きす

はなちるさとをたつねてそとふ

右 あかつきしのひたる前よりかへるとて

冷泉院の左のおと、の女御の御もとに

まうて給へるに あさまたきゆき

きのみちのたよりもすきぬこ、ろは

うれしかりけりと侍ければ

右大将 まさこきみ

たまほこのみちゆきすりのたよりにも

とふへきやとはさしてこそくれ

七番

左 ゆふたちのなこりす、しきよゐの

まさきに温明殿のわたりをた、

すみありき給に琵琶をいとおもし

ろくひけはあつまやをしのひやか

にうたひてたちより給へるに

源内侍のすけ

たちぬる、人しもあらしあつまやの

うたてもかゝるあまそ、きかな

右 嵯峨にて宰相のきみのつほねに

て女君の琵琶のねをき、て

入道右衛門督

つけよなをまやのあまりのあまそ、き

われたちぬれてかへりわひぬと

八番

左 むらさきのうへかくれ給てつきの

としの秋

たなはたのあふせをくものよそにみて
わかれのはにつゆそをきそふ

右 右大将三位中将ときこえしとき北山

にこもりぬとつたへきゝて

寢覚上

しらすりしやまへの月をひとりみて

よになきみとやおもひいつらん

九番

左 せりかわの大将のとをきみの秋のゆふ

へにおもひわひたる所かきたるゑを

みて

右大将

おきのはにつゆふきむすふあきかせも

ゆふへそわきてみにはしみける

右 白河院にてみのありさまおほし

つゝくるゆふくれに

ねさめのうへ

しをれわひわかふるさとのおきのはに

みたるとつけよあきのゆふかせ

十番

左 兵部卿の宮右のおと、にかよひたまひて

のちかのうへにたいめんしてしつかなる

よのけしきむかしにかよへる御けはひ

をえしのひあへすみすのそはより

そてをひきよせてくやしとおもひわ

たるこ、ろのうちをもらしいて、もかひ

なきものから人めのあひなきをお

もひかへしてたちいて、あしたに

右大将

いたつらにわけつるみちのつゆしけみ

むかしおほゆるあきのそらかな

右 年ひさしくたえてのちめくりあひ

たまへる秋月のひかりむしのこゑも

た、むかしなからのこ、ちしていしやま

にてすみはつましきちきりなりけん

ときこえしほとわかれ給しよのこ、ち

おほしいてられてなかくこ、ろつくし

もや、たちまさるに人やりならずな

みたにくれて

関白

兵部卿の宮のうへ

かきりとていのちをすてしやまざとの
よはのわかれに、たるそらかな

十一番

左 柏木権大納言 おきてゆくそらもしら

れぬしの、めにいつこのつゆのか、るそて
なりとうれへきこえける返し

二品内親王 女三宮

あけくれのそらにうきみはきえな、ん

ゆめなりけりとみてもやむへく

右 ねさめのなけきのはしめあかつきの

わかれに よにしらぬつゆけさなりや

わかるれとまたいとか、るあかつきそ

なきと侍ける返し

民部卿のうへ

しらつゆのか、るちきりをみるひとも

きえてわひしきあかつきのそら

十二番

左 なれけるそてのうつりかをと侍り

ける御返し

みなれぬるなかのころもたのみしを

かはかりにてやかけはなれなん

右 関白一品宮にまいりそめ給ける日おも

ひなけき給へるをなくさめて

よしやきみなかきちきりはたえせしを

いのちのみこそさためかたけれと侍け

れは

あねうへ

たえぬへきちきりにそへておしからぬ

いのちをけふにかきりてしかな

十三番

左 内侍のかみやかてきえなはたつねて

もと侍けれは

いつれそとつゆのやとりをわかんまに

をさ、かはらにかせもこそふけ

右 院の御けしきよろしからて女宮くし

たてまつりて冷泉院にわたらせた

まひにけるのち右大将白河院にまい

りてむなしくたちかへるとてわた

くしにたにわすれたまふなと侍ければ

女三宮の中納言

あらしふくあさちかすゑのしらつゆの

きえかへりてもいつかわすれん

十四番

左 みやすところかくれてのち内より

みやきの、つゆふきむすふかせのをと

にとおほせ事ありければ

桐壺更衣母

あらかかせふせきしかけのかれしより

こはきかうへそしつこ、ろなき

右 中納言のきみきえかへりてもいつかわす

れんときこえける返し

右大将

ふきはらふあらしにわひてあさちふの

つゆのこらしときみにつたへよ

十五番

左 あふひのうへかくれ給にしち九月

九日きくにつけてさしをかせた

まひける

前坊御息所

人のよをあはれと大きくもつゆけきに

をくる、そてをおもひこそやれ

右 白河院よりあなかちにのかれてた

まへるをはしめてきかせたまひて

つかはしける御ふみに

中宮

みしま、のゆめのうちにそまとはる、

たちをくれにしみをうらみつ、

十六番

左 きりつほの御息所かくれてのち

故院御製

たつねゆくまほろしもかなつてにても

たまのありかをそことしるへく

右 中宮より たちをくれにしみを

うらみつ、と侍りける御返し

ねさめのうへ

くものなみへたつるそらにた、よへと

きみにつたふるまほろしもなし

十七番

左 すまのうらへおほしたちしころ

院の御はかにまいらせたまひて

なきかけもいか、みるらんよそへつ、

なかむる月もくもかくれぬる

右 母うへかくれ給ぬときこえしとき

よりきた山にこもりゐてつきの

としのはるさくらにつけて中宮に

右大将

しらすりしみやまかくれのはなのいろを

あはれむかしとなくくそみる

十八番

左 齋宮群行日又も、しきのうちを

みたまひて前坊御時ち、おと、の

事などおもひいて、

御息所

そのかみをけふはかけしとおもへとも

こ、ろのうちにもそのかなしき

右 内侍のかみ入内のときそひてまいり

たまへるにうちのうへ きみも、し

むかしわすれぬものならはおなしこ、ろ

にかたみとおもへとのたまはせける御返

し

寢覚のうへ

も、しきをむかしなからにみましかは

とおもふもかなししつのをたまき

十九番

左 八の宮宇治にこもりゐてとしへて

のち右大将宰相中将ときこえしを御

つかひにて御せうそこありしに

冷泉院御製

よをいとふこ、ろはやまにかよへとも

やへたつくもをきみやへたつる

右 女君ひろさわにかきこもりぬと

きかせたまひて内より蔵人少将を

御つかひにて

院御製

なにことをいかにうらみてしらくもの

やへたつみねにおもひいるらん

廿番

左 宇治にて身をすてけるころ

浮舟のきみ

なげきわひみをはすつともなきかけに
うきな、かさんことをこそおもへ

右 よをそむきてのち山のみかとの御

ふみに このよにはうくてわかれし

なかなるをいかにいりにしひとつみち

なりとのたまはせたる御返し

寝寛のうへ

かきりなくうきみをいとひすてしまに

きみをもよをもそむきにしかな

廿一番 左同 右水濱松

左 みやこにかへりたまひてのちあかし

のうへにつかはしける

なげきつ、あかしのうらにあざきりの

たつやと人をおもひやるかな

右 渡唐の、ちたひねのゆめにひのもと

の大將のひめきみ たれによりなみた

のうみに身をしつめしほたる、あま

となりぬとかしるとみえ侍ければ

中納言 濱松中納言

ひのもとのみつのはま、つこよひこそ

ゆめにみえつれわれをこふらし

廿二番

左 やかてまきる、わかみともかなと

侍ける御返し

入道後の宮

よかたりに人やつたへんたくひなく

うきみをさめぬゆめになしても

右 山かけにもいみしたまへる夜こ、ろ

よりほかのゆめちにまとひ給けるあか

つき

河陽縣の後

うしとおもふあはれとおもふしらざりし

くもるのほかのひとのちきりを

廿三番

左 あかしにてはしめてつかはしける

をちこちもしらぬくもゐをなかめわひ

かすめしやとのこすゑをそとふ

右 くもるのほかのと侍けるのちこ、ろ

のみあくかれて

中納言

あらかりしおほくのなみにそほちつ、
こひのやまちにまとひぬるかな

廿四番

左 故院かくれさせたまひて御法事すき

いろあらたまりにしはるのはしめよの中
はなやかにきこゆれと宮のうちはあらた
まれるしるしもみえず人めまれなるに
大将いつしかまいりたまひていとあはれに
みめぐらして なかめかるあまのすみかと
みるからにまつしをたる、まつかうらし
まときこえ給おくふかくもあらず仏に
ゆつりきこえたまへるおまし所なればす
こしけちかきこ、ちして

入道后の宮

ありしよのなこりたになきうらしまに
たちよるなみのめつらしきかな

右 ち、の大臣もろともに蜀山にこも

りぬたまへるころ日本の中納言

唐の天子使としてたつねいりたるに

河陽縣の後

よのうさにしほらていりしおくやまに
なにとて人のたつねきつらん

廿五番

左 をの、やまさとにて

うきふね

こころにはあきのゆふへをわかねとも
なかむるそてにつゆそみたる、

右 もとのくに、かへりなんとての秋の夕

女王のきみか山陰の家にたちよりて

せうそこすれとつれなければ

中納言

あはれしる人こそさらになかりけれ
いまはとおもふあきのゆふかせ

廿六番

左 よのわつらはしさにひさしくをと

つれたまはぬにふゆたつ日はつし

くれけしきたちたるに

二条の内侍のかみ

こからしのふくにつけつ、まちしまに

おほつかなさのころもへにけり

右 中納言もとの国にかへりなんとするころ

八韻の詩にそへてつかはしける

一の大臣の五の君

いまやとふけふやみゆるとまちつ、も

おなしよにこそなくさみてふれ

廿七番

左 みやこにかへりたまひなんとてのころ

あかしのうへにつきせぬことをちきり

たまふにかはらぬなみのこゑも秋風は猶

ひ、きことなるゆふくれしほやくけふり

かすかにたなひきてとりあつたる所の

さまなれは

このたひはたちわかるとも、しをやく

けふりはおなしかたになひかん

右 いまやとふけふやみゆるといへる返し

中納言

わかるへきのちのなけきをおもはずは

またれましやはあさなゆふな

廿八番

左 大井にすむころおはしまして月いる

ほどにかへりたまふありしよの事お

ほしいつるおりすくさす琴の御ことを

しいてたれはえしのひあへすかきならし

給にしらへもかはらす ちきりしにかは

らぬことのしらへにてたえぬこゝろのほと

をしりきやとのたまひける御返し

明石のうへ

かはらしとちきりしことをたのみにて

松のひ、きにねをそへしかな

右 婦朝ちかくなりてのころまかれりける

にうきくも、まかはぬ月かけに池のなか

しまもみちのかけなる楼のうへにこと

ひはひきあはせてわかれおしむに中納言

日のもとや山よりいてん月みてもまつそこ

よひはこひしかるへきと申しけるに琵琶

をもちながら

大臣の五君

かたみそとくる、よことになかめても

なくさまめやはなかななる月

廿九番

左 みやこにかへりたまひてもとの御

くらみあらたまりてはしめて内にま

いり給へりけるに

わたつうみにしつみうらふれひるのこの

あした、さりしとしはへにけり

右 渡唐の舟ののるとてみやこへ

中納言

かきくらすなみたはそてにさわきつ、

もろこしふねにけふそのりぬる

卅番

左 すまのわかれになみたのかはにし

つみしやなかる、みをのはしめなり

けんと侍ける返し

二条の内侍のかみ

なみたかはうかふみなわもきえぬへし

なかれてのちのせをもまたすて

右 中納言もろこしにわたりてのちさ

ま〜おもひくたけて

大将姫君

うしとたにおもひいてしとしのへとも

なをあまのとをあけかたの月

卅一番

左 すまよりあかしのうらにうつりた

まひてむらさきのうへの御もとに

はるかにもおもひやるかなしらさりし

うらよりをちにうらつたひして

右 帰朝の、ちつくしにてをくりにまう

てきたる唐人のかへるにつけて河

陽縣後の女王の君に

中納言

なにしかはたとへていはんうみのはて

くものよそにておもふおもひは

卅二番

左 前太政大臣宰相中將ときこえしとき

すまのうらにまうて、かへり給あさ

ほらけのそらにかりかねのつれて

わたるを御覽して

ふるさとをいつれのはるかゆきてみん

うらやましきはかへるかりかね

右 唐人のかへるにつけて大臣の五君の

もとに

中納言

あはれいかにいつれのよにかめくりあひて
ありしありあけの月はみるへき

卅三番

左 源氏の中將ときこえしときわらはや

みにわつらひてきたやまにいのらせた

まひしをこたりてかへり給日御

かわらけたまはりて

北山上人

おくやまの松のとほそをまれにあけて

またみぬはなのかを、みるかな

右 日本中納言のわかれをしたひて

このくにまでをくりまできて

かへりわたるひ

大唐国宰相

あふこなみくものきはめをへたてにて

いつともあらしきみをこふらく

卅四番

左 藤壺后にたちていらせ給夜御

ともにつかまつり給て

つきもせぬこ、ろのやみにくる、かな
くもゐに人をみるにつけても

右 中納言帰朝の後御前宴に候て筆

のことつかうまつるに御そぬきてた

まはずとて

御製

わかれてはくもゐの月もくもりつ、

かはかりすめるかけもみざりき

卅五番

左 宇治にてなかめはれぬころ大將

水まさるをちのさと人いかならんと

侍りければ

浮舟

さとのなをわかみにしれはやましるの

うちのわたりそいと、すみうき

右 母のあまきみまかりにけるのち

吉野の姫君

みよしの、雪のなかにもすみわひぬ

いつれの山をいまはたつねん

卅六番 左同 右参川仁左介留

左 なかあめのころうきふねのきみに

兵部卿のみこ

なかめやるそなたのくも、みえぬまで

そらさへくる、ころのわひしき

右 承香殿女御桃園にわたりて物忌し

給所におもはぬほかにその人ともし

すゆめのこ、ちしてたちいて、あし

たに

権中納言

参川仁左介留
宰相中将

今日もくれあすもすきなはいか、せん

ときのまをたにたへぬこ、ろを

卅七番

左 ゆふかほのつゆきえてのち御こ、ち

のまきれかきたえをとつれたまはぬ

にしわひて

空蟬の尼公

とはぬをもなとかと、はてほどふるに

いかはかりかはおもひみたる、

右 頭中将たのめわたりつ、まてとこさ

りければ

承香殿女御中納言

たのめすはさてもねなましなそやこの

くる、よなくまたせかほなる

卅八番

左 ち、みこかくれてのち右大将うち

おはして法事のことなときこえあは

せたまふに名香のいとひきみたされ

てほのくみゆるに あけまきに

なかきちきりをむすひこめおなしとこ

ろによりもあはなんとかきつけたま

へれば

姫君

ぬきもあへすもろきなみたのたまのをに

なかきちきりをいか、むすはん

右 みかにはさける所たかへに権中納言

あなかちにせうそこしよりてあら

ぬ人とみあらはしたるけしきみえ

ければ

太皇太后宮御匣殿

なけきこりみちまとひけるやま人の
ゆくてにかゝるものをおもふよ

卅九番

左 あかしにてよなくかよひそめたまひ

しころ紫上に

しほくとまつそなかる、かりそめの

みるめはあまのすさひなれとも

右 御匣殿にかよひそめてかへりてあし

たにまつかきみたる、こゝろのうちに

かきいつへきことのはもおほえさりければ

権中納言

もしをくさいかにか、ましむねにたく

こひよりほかにくゆるけふりを

四十番

左 内侍のかみにかよひそめてのころこゝろ

ならずよかれしてあしたに

玉鬘右大臣

こゝろさへそらにみたれしゆきもよに

ひとりさえつるかたしきのそて

右 あかつきいつる頭中将にいりかはりて

ありつる人とおもはせて承香殿の中納言
のきみに

権中納言

えそゆかぬまたしもふかきあけくれの

わかれのみちはたちかへりつ、

四十一番

左 藤内侍のすけ五節の舞姫にて

六条院にまいらたるに屏風のつま

よりさしのそきて

右大臣

あめにますとよをかひめのみや人も

わかこゝろさすしめをわするな

右 三位中将弁少将ときこえし時ひもの

とけたるをひきむすふとて

わするなとわかむすひをくあかひもを

めぐりあふまで人にとかすなといひか

けたるに

左衛門督舞姫

をみころもた、ゆきすりのてすさひを

むすひしひもとたれかたのまん

四十二番

左 たいのうへ宇治におはせしにかよひ

そめさせ給てあしたに

兵部卿のみこ

よのつねにおもひやすらんつゆしけき

みちのさ、はらわけてきつるも

右 はしめてかへりてあしたに御匣殿

のもとに中納言にかはりて

三位中将

あさしものおくれはくる、ふゆのひも

けふこそなかきものとしりぬれ

四十三番

左 女三宮の御事おもひみたれてなか

めくらすとて

柏木権大納言

もろかつらおちはをなに、ひろひけん

なはむつまじきかさしなれとも

一右 承香殿女御中納言のきみ三位中将につ

たへてたれとかやをとにき、しよけふ

たにもあふひてふなをかけてみせなん
といひたる返し

権中納言

もろ人のなへてあふひのなを、しみ

かけしやけふのかさしなりとも

四十四番

左 うつせみのやとりの御かた、かへの

あかつき

つれなきをうらみもはてぬしの、めに

とりあへぬまておとるかすらん

右 しのひていつるあかつき春宮の宣

旨に

権中納言

なきぬへしあかぬわかれのあかつきを

しらするとりのこゑのつらさに

四十五番

左 ふちのうらはのうらとけてあしたに

右大臣

とかむなよしのひにしほるてもたゆみ

けふあらはる、そてのしつくを

右 かへりてあしたに春宮官旨に

権中納言

とは、やないかなるゆめをみつるよの
なこりのそてかかくはぬる、と

四十六番

左 長生殿のふるきためしはゆ、し

くて弥勒のよをかねて うはそくか
をこなふみちをしるへにてこむよも

ふかきちきりたかふなどのたまひ

し御返し

ゆふかほのきみ

さきのよのちきりしらる、みのうさに
ゆくすゑかねてたのみかたさよ

右 権中納言 こ、ろみにつらきこ、ろをな

らは、やさてうらみすやありけると

みんと侍りける返し

春宮官旨

うきにまたつらきをそへてなけ、とや
さのみはいか、ものをおもはん

四十七番

左 齋院御禊みたまひけるくるまにはし

たなきこといてきにける日御まへわた
りをほのかにみ給て

前坊御息所

かけをのみみたらしかはのつれなきに
みのうきほとそいと、しらる、

右 御匣殿にかよふよしきこえて後の宮

ところあらはしせんとわざと事くし
くおほしいそきしにのかれてのち

かのきみのもとに

三位中将

す、みせしかつらのさとのかはかせに
みぬよのこひをさましやはせし

四十八番

左 冷泉院いはけなくおはしまし、とき

なてしこのはなを御覽して

入道后宮

そてぬる、つゆのゆかりとおもふにも
なをうとまれぬやまとなてしこ

右 三位中将のめのもとにうまれ

たるひめきみを、くりをかすとて

右大臣上

そてぬれしのはらのつゆとみるからに
をきところなくものそかなしき

四十九番

左 右大将 いたつらにわけつるみちの露

しけみときこえ給けれとをのつから

しみにけるうつりかをとかめいてさせ

たまひて

兵部卿のみこ

また人になれけるそてのうつりかを

わかみにしめてうらみつるかな

右 御匣殿はかなくなりてのち正日

に経仏など供養せさすとてひ

とりなかめて

三位中将

かへさはや人もみをもうらみつ、

へたてはてつるなかのころもを

五十番

左 宇治にて身をすてん事を

おもひて

浮舟

からをたにうきよのなかにと、めすは
いつくをはかときみもうらみん

右 御匣殿法事に誦経せさす

とて

権中納言

おほそらにひ、かんかねのおとことに

しつまんそこもつかふはかりそ

五十一番 左同 右朝倉

左 内の御つかひにてきりつほのみやす所

の母のもとにまうて、まちおはします

らんといそきかへるに月いりかたちかき

そらきよくかせす、しくふきてくさ

むらのむしのこゑくもよをししかほなる

に

ゆけひの命婦

す、むしのこゑのかきりをつくしても

なかきよあかすふるなみたかな

右 参河のかみよをそむきにける後

ふるさとの月をみて

朝倉女君

いまこむといひてわかれし君により

有明の月をいくよみつらん

五十二番

左 すまのうらより入道后宮に

まつしまのあまのとまやもいかならん

すまのうら人しほたるゝころ

右 入道ゆくゑなくいてにける後

朝倉君母

ゆきわかれいつれのやまにあとたえて

おつるなみたのいろかはるらん

五十三番

左 すまのわかれに花ちるさとにき

こえたまひける

ゆきめぐりつるにすむへき月かけの

しはしくもらんそらなゝかめそ

右 権中納言ときこえし時しらかはにて

ふしまちの月まつとて中納言君もろ

ともになかめ給に みるまゝに月も

うきよにすみわひて山よりやまに

いりやしにけんときこえければ

関白内大臣

なにかうきよしこゝろみよなかつきの

ありあけの月のありやはてぬと

五十四番

左 は、き木のこゝろをしらてそのはら

のみちにあやなくまとひぬるかなと

侍ける御返し

空蟬の尻きみ

かすならぬふせやにをふるなのうさに

あるにもあらずきゆるは、き、

右 みそめたまへりしころわかこゝろなか

らうつし心もなきほとに人のそしらん

こともたとるましうおほゆるをおほつか

なきなん心うきなをなのりせよとの

たまひければ

朝倉女君

なのるともきのまろとのゝくもゑなる

あさくらまてはたれかたつねん

五十五番

左 ゆふかほのきみいさなひいて、なにか

しの院にもろともになかめくらし

たまふとてしのひたまひし御さま

あらはれてのち

ゆふつゆにひもとくはなはたまほこの

たよりにみえしえにこそありけれ

右 おもひわひてしらかはよりしのひてい

つるかはらのほとにておと、の御車のあ

ひたまへるすたれををしあけてさし

のそきたまへるをみて

朝倉女君

たまほこのみちゆきすりのかはかりも

あはれいつれの上にかみるへき

五十六番

左 ひもとくはなはたまほこのと侍り

ける御返し

夕顔の上

ひかりありとみしゆふかほのうはつゆは

たぞかれときのそらめなりけり

右 身のありさまおもひみたれてしらかは

よりいてなんことをおもひたつひ

うちとけてみつるなこりにつねよりもこ

ひしさまさるあさかほのはなと侍り

ける御返し

朝倉女君

おくつゆもひかりそへつるあさかほの

はなはいつれのあかつきかみん

五十七番

左 もえんけふりもむすほ、れと侍し

御返し

二品親王 玄三宮

たちそひてきえやしなましようきことを

おもひみたる、けふりくらへに

右 権中納言ときこえし時あさくらのきみ

あふみのうみに身をなけてけりと人

つてにき、たまひけるころいしやまに

まうて給とて

関白内大臣

こひわひぬわれもなきさにみをすて、

おなしもくつとなりやしなまし

五十八番

左 あかしにおはしましてのちとしころ

はるけぬこ、ろのやみも御ものかたりのつい

てにもらしいて、うれへきこゆるにこ、ろ

ほそきひとりねのなくさめにもさらは

みちひき給へかしのたまはずれば

明石入道

ひとりねはきもしりぬやつれくと

おもひあかしのうらさひしさを

右 心ならずさすらへけるころ石山にこも

りておもひあかすに権中納言ときこえ

し時こもりあひたまへるをよそにき、

て

朝倉女君

なみのよるあかつきことのかせのをとは

むかしの秋にかはらざりけり

五十九番

左 なにのあやめもいかにわくらんと侍し

御かへり

明石の上

かすならぬみしまかくれになくたつは

けふもいかにととふ人そなき

右 式部卿宮のひめきみみやこへむかへ

られたまふをいたしたて、

朝倉女君

ひきわかれいつかこたかきたかさこの

松のこすゑをそれとたにみん

六十番

左 紫の上かくれたまひてのちむかしの野

わきのゆふへほのかなりし御をもかけ

いまはのほとのかなしさなとおもひつ、けて

右大臣

いにしへの秋のゆふへのこひしきに

いまはとみえしあけくれのゆめ

右 あざくらのゆくゑなさをつきせす

おほしなけきしころ

関内内大臣

あけぬ夜の中にもやかてまとふかな

はかなきゆめをみるとせしまに

六十一番

左 そらさへくる、ころのわひしさと

侍ける御かへり

うきふね

かきくらしはれせぬみねのあまくもに

うきてよをふる身をもなさはや

右 あさくらのきみに

式部卿のみこ

ふくかせのつきにまとひしみちのつゆ

きえやしにけんとたにとへかし

六十二番

左 一条のみやす所のとふらひに小野にお

はして

右大臣

やまさとのあはれをそふるゆふきりに

たちいてんそらもなきこ、ちして

右 きえやしにけんとたにとへかしといへ

りし御返し

朝倉女君

きえにけりあらましかはなやまさとの

あきはいかにととはましものを

六十三番

左 六条院みやこにかへりたまひてのちすみ

よしにまうてたまへるにうらつたひのかせ

のさはきもおもひいて、たちいてさせ

給へるにきこえさせける

参議惟光朝臣

すみよしの松こそものはかなしけれ

神代のことをかけておもへは

右 むかしのちきりたかへすめぐり

あひて

朝倉女君

あはれともうしともえこそいはしろの

野なかの松のむすほ、れつ、

六十四番 左同 右袖奴良須

左 右大臣かよひそめたまひて六条院^後

をりたちてくみはみねともわたりかは

人のせとはたちきらさりしをときこ

えさせ給けるに

玉鬘尚侍

みつせかはわたらぬさきにいかて猶
なみたのみのあはときえなん

右 承香殿の女御 いはしとていむには

あらすうきしつみをいたるあしのねに
さはるみをときこえさせ給けるに

関白 袖奴良須宰相中将

ことはりにうきしつまるゝみつのはの
やかてきえぬるわかみともかな

六十五番

左 小野にすむころあまきみはつせにま

うつとてさそひけれは

浮舟

はかなくてよにふるかはのうきせには

たつねもゆかしふたものすき

右 はゝのせんしみまかりにけるのち

関白とふらひ給ける御返し

承香殿小宰相

たれもみななからふましきつゆのよに

なとことのはをとゝめをきけん

六十六番

左 宇治におはしかよふころ山ちのつゆ
をわけ入給とて

右大将

やまをろしにたへぬこのはのつゆよりも
あやなくもろきわかなみたかな

右 山里にすみけるころをとゝわたりて

こからしのかせもをとにそきゝわた
るかはせるそてのひましなけれはと

侍けるかへし

中納言君

いつまでかよそにもきかんともすれば

身にしみぬへき山のあらしを

六十七番

左 あねの女君かくれて後宇治律師わらひ

たてまつるとて 君にとてあまたの

はるをつみしかはつねをわすれぬはつ

わらひなりときこえたる御返し

兵部卿宮上

このはるはたれにのみせんなき人の
かたみにつめるみねのさわらひ

右 産の事ちかくなりて山ざとに

こもりぬたるころてならひに

中納言君

さけはちるものとみしかとこのはるは

はなやをくれてわれをしのはん

六十八番

左 柏木権大納言かくれて後右のをと、しは

くくとふらひものし給ける御をくり物に

と、めをかれたる笛をたてまつりてすこ

しふきならしたまへるをき、て

一条御息所

つゆしけきむくらのやとにいにしへの

秋にかはらぬむしのこゑかな

右 秋ころむしのねをき、て

中納言君

むしのねもあはれそまさるあさちはら

なかはすきゆく秋とおもへは

六十九番

左 女君かくれてのち宇治にて

右大将

われもまたうきふるさとをあれはては

たれやとりきのかけをしのはん

右 中納言君心ならずかきこもりたる秋

関白

きくのつゆきゆはかりにもをちしかな

あふことたゆる秋のなみたは

七十番

左 宇治のみこ姫君にさうのことそ、の

かして 我なくてくさのいほりは

あれぬともこのひとことはかれしとそ

おもふと侍けるに

右大将

いかならんよにかゝるへきなかきよの

ちきりむすへるくさのいほりを

右 中納言君かきこもりてのち后の宮

にまいりてつねにかたらひ給しとくち

のたてたるをみたまひて

関白

ありしよのくさのはらそとみるからに

やかてつゆともきえぬへきかな

七十一番

左 紫上かくれたまひて後ほたるのとひ

かふを御覽して

よるをしるほたるをみてもかなしきは

ときそともなきおもひなりけり

右 もとの上さまかへ給へるとふらひに

わたり給へるにむしのごゑあはれ

なれは

関白

よもすからおもふこゝろをしりかほに

とふらふむしのごゑそかなしき

七十二番

左 あねきみかくれて後兵部卿宮上に

御ふくぬき給へきことなときこえ給

とて

右大将

はかなしやかすみのあるもたちしまに

花のひもとくをりもきにけり

右 としあらたまりて大将 はるひさす

みきはのこほりけふまでや猶とけ□

たき心なるらんどきこえたまひける

に

院内親王

はるをあさみとくるみきはもあらしかし

むすひし水のなこりのみして

七十三番

左 女三宮六条院にわたりたまへりし

ころ御てならひに

紫の上

身にちかく秋やきぬらんみるまゝに

あをはのやまもうつろひにけり

右 大将の御けしきいかにみえけるころ

にか

院内親王

おほかたのはきのしたはをみしほとに

わかみの秋になりにけるかな

七十四番 左同 右心高

左 三条宮にもろともをいゝて給しに

人しれぬものおもひつきそめてよも

すからなけきあかしたまひしに女君

くもるのかりもわかことやとひとりこち
給をきゝて

右大臣

さよなかにともよひわたるかりかかね

うたてふきそふおきのうはかせ

右 人しれぬ御けしきをみしらぬさまに

のみもてなしければ春宮におはしまし
し時

御製

はなのいろをおもひもわかぬうくひすに

かすめわひぬるはるにもあるかな

七十五番

左 兵部卿宮 よにしらすまとふへきか

なさきにたつなみたまみちをかき

くらしつゝとのたまはせけるに

浮舟

なみたをもほとなきそてにせきかねて

いかにわかれをとゝむへきみそ

右 さとにいてたるあしたよるよりあめ

ふりけるに宮の御ふみにいかにくおもひ

あかしてけさみれはそてのうへにもに
たるそらかなと侍ければ

春宮のせむし

水のうへにうたてた、よふうたかたの

いまもうきたる心ちのみして

七十六番

左 あふひのうへかくれたまひにし秋の

くれにあさかほのみやに

わきてこのくれこそものはかなしけれ

ものおもふ秋はあまたへぬれと

右 権中納言ときこえし時一品の宮に

右大臣

わかなかすなみたのいろに、たるかな

ものおもふやとにをつるもみちは

七十七番

左 紫の上かくれ給てまたのとしのくれに

ものおもふとすくる月ひもしらぬまに

としもわかみもけふやつきぬる

右 春宮におはしまし、時九月はつかあま

りせむしまかてんとするによもすから

おほとこのこもらすゆくすゑかねてちき
らせたまひて

御製

いつまでかたえゆくすゑをたのみつ、
さためなきよにものをおもはん

七十八番

左 紫のうへかくれたまひて後御ふみとも

御覧して

してのやまこえにし人をしたふとて

あとをみつ、もなをまとふかな

右 せむしゆくゑなくなりけるのち

ゆめに なげくまにたまひもみな

なくなりていまはむなしきからとしらす

やといふと御覧して

御製

こひわひてまとふわかたまことならは

むなしきからのゆくゑたつねよ

七十九番

左 六条院にわたりたまひてのち院の

御ふみに なかみちをへたつことはな

けれとも心みたる、けさのあはゆきと侍
りける御かへし

二品内親王

はかなくてうはのそらにそきえぬへき
かせにた、よふはるのあはゆき

右 右おと、中納言ときこえし時 みるほとは

ゆめはかりなる心ちしてゆきまとはる

るあけほの、そらと侍りけるかへし

春宮宣旨

あけくれのくもともそらにきえなはや

つきせぬゆめのうちにまとはて

八十番

左 あふひのうへかくれ給てのち

きみなくてちりつもりぬるとこなつの

つゆうちはらひいくよねぬらん

右 つきせぬことをおほしめしなけき

けるころ

御製

ともしひのつくるをきはになかめつ、

まどろまぬよをいくよへぬらん

八十一番

左 つゆのやとりに君を、きてと侍ける

御返

紫の上

かせふけはまつそみたる、いろかはる

あさちかつゆにかゝるさ、かに

右 いつとなきものおもしさにひとり

なかめて

春宮のせむし

秋ふかきあらしのやまのこきませに

さまくものをおもふころかな

八十二番

左 おまへのせんさいのしもかれを女

君もろともになかめたまひて

兵部卿のみこ

ほにいてぬものおもふらし、のす、き

まねくたものつゆしけくして

右 一条前齋院にてつれなさをうらみ

きこえて

右大臣

いと、しくおきのうはかせふきみたり

こゝろまとはす秋の夕くれ

八十三番

左 一条のみやす所かくれて後右のおと、

ものおほしみたる、さまにみえければ

右大臣上

あはれをもいかにしりてかなくさめん

あるやこひしきなきやかなしき

右 冷泉院かくれさせたまひてのころ

一品宮の御とふらひに

春宮せむし

なかくにおとろかさしとしのふれと

みしやゆめとそわすれわひぬる

八十四番 左同 右取替波也

左 なかあめのころうきふねの君に

右大将

水まさるをちのさと人いかならん

はれぬなかめにかきくらすころ

右 権中納言はしめて これやさはいり

てはしけきみちならんやまみちし

るくまとひぬるかなと侍ける返し

右大臣四君

ふもとよりいかなるみちにまとふらん

ゆくゑもしらぬをちこちのやま

八十五番

左 北山にて はつくさのわかはこのうへ

をみつるよりたひねのそてもつゆそ

こほる、と侍ける御かへり

故右衛門督家

崇上
祖母

まくらゆふこよひはかりのつゆけさを

みやまのこけにくらへさらなん

右 心ちれいならてこもりゐたまへる

ころ月をみて

権中納言 後内大臣上

くもとなりけふりとならんゆふへにも

こよひの月のかけをわするな

八十六番

左 すまのわかれのころか、みをみたま

ふとてむらさきのうへに

身はかくてさすらへぬともきみかあたり

さらぬか、みのかけは、なれし

右 あらぬさまにおもひなりてかきこ

もりなんとて四君のもとにあからさ

まにたちいりていつるにふえをふきす

さひて

権中納言

しのふへきふしもあらしなふえたけの

このよをかきるねをつくすとも

八十七番

左 うきふねの君宇治にわたして後

右大将

さとのなもむかしなからにみし人の

おもかはりせるねやの月かけ

右 式部卿のみやの御いみにこもりゐて

女君に

内大臣 宮宰相

こひわひてなかきよすからねさむれは

ならはぬ秋の月をしるかな

八十八番

左 すまのうらにおほしたちしころ致仕の

おと、にわたりたまひて大宮にきこえ
させ給ける

とりへやまもえしけふりもまかふやと
あまのしほやくうらみにそゆく

右 四君いまおと、にわたりてのち内の

おと、おほしなきてかきこもり

給へるころおほきおと、にわたりて

ひころかへりたまはぬに内のおと、

きみこふときえみきえすみゆきかへり

こえそわつらふしてのやまみちと侍ける

かへし

内大臣上

とりへ山もえしけふりはそれかとも

われをはたれかいまはたつねん

八十九番

左 弘徽殿のほそ殿にてとのゐ申の

こゑきこえけるに

二条の内侍かみ

こ、ろからかたくそてをぬらすかな

あくとをしふるこゑにつけても

右 よをうらみてあふみのうきはしと

いふ所にこもりなんとて

右大臣四君

あさほらけゆふつけとりも、るとともに

なくくこゆるあふさかのせき

九十番 左同 右露宿

左 六君に兵部卿のみやかよひそめさせ

給ける夜ふけゆくまでおはしまさ

さりければ

右大臣

おほそらの月たにやとるわかやとに

まつよひすきてみえぬきみかな

右 よをそむきてのち権中納言のもとに

入道兵部卿親王

まつかきのましはのとほそさ、すして

あけぬくれぬと君をこそまで

九十一番

左 阪磨のうらにまうて、かへりたまひし

あした くもちかくとひかふたつも

そらにみよわれははるひのくもりなき

身そと侍ける御かへし

前太政大臣

たつかなきくもゐにひとりねをそなく

つはさならへしともをこひつ、

右 あかつきほいとけんとおほしたち

ける夜いまはとても、しきのうちを

いつるに内のうへのつねはいとみておし

ませ給御琵琶をのこるてなくひき

すまさせたまへるみかきのとのへまで

はるかにきこえけるに

入道兵部卿のみこ

くものうへをおもひはなれていつれとも

こゝろそとまるなかはなる月

九十二番

左 すまのわかれちかくなりてわたり

たまへりしに

花ちるさとのうへ

月かけのやとれるそてはせはくとも

とめてもみはやあかぬひかりを

右 ふるさとの内侍のかみをこゝろよりほか

に御覽しそめてたちわかれさせ

給とて

御製

なからへてよにありあけの月すまは

まためぐりあふちきりともかな

九十三番

左 皇太后宮入内の時御くしのはこなと

たてまつらせ給とて

朱雀院御製

わかれちにそへしをくしをかことにて

はるけきなかと神やいさめし

右 いせにおはせし時内侍かみに

前齋宮

からころもみもすそかはにそてぬれぬ

しめのほかなる人をこふとて

九十四番

左 齋宮群行のひ御息所に

ふりすて、けふはゆくともす、か、は

やそせのなみにそてはぬれしや

右 齋宮くたりたまはんことちかくなり

てのころ前齋宮 そのかみの心ち

こそすれおもふことなるす、か、はこゆ

ときくさへと侍ければ

齋宮女別当 元宰相更衣

おもふことなるとなけれどす、か、は

やそせのなみにぬれつ、そゆく

九十五番 左同 右末葉露

左 兵部卿宮宇治におはしましそめたる

夜姫君にもこのしにたいむしてつ

きせぬつれなさをうらみあかし給とて

右大将

しるへせしわれやかへりてまとふへき

こ、ろもゆかぬあけくれのみち

右 みやつかへにいてたつとてくるまよ

せたるにあね姫君に

中納言

わするなよこ、ろにもあらてわかれぬる

このゆふくれそかたみなるへき

九十六番

左 あねの姫君かきりにおはせし時右大将

なくねかなしきあさほらけかなと侍

ける返し

兵部卿の宮のうへ

あかつきのしもうちはらひなくちどり

ものおもふ人のこ、ろをやしる

右 宰相中将ときこえし時ひさしくれい

ならさりしまきれに女君のゆくゑ

たつねうしなひて

右大臣

こひわたるふゆのよなくねさめして

しくれかうへのあられをそきく

九十七番

左 紫のうへかくれたまひてまたのとし

のなつ御前のいけのはちすさかり

なるをいかてなみたのとなかめくらさ

せ給ゆふつかたひくらしのはなやかに

なきいてたるに

つれくと我なきくらすなつのひを

かことかましきむしのこゑかな

右 やまひかきりになりて

右大将

いつのひかりのはかせにさそはれて

すゑはのつゆのきえは、つへき

九十八番 左同 右海人菖藻

左 六条院の春のおと、にて人くまり

もてあそひけるにこ、ろよりほかの

みすのひまより女三宮をみたてまつり

ていと、しきおもひそひにけるのち

かのみやのこし、うかもとへ

柏木の権大納言

よそにみておらぬなけきはしけれとも

なこりこひしき花のゆふかけ

右 ふちつほにても、ひまよりきさき

の宮をほのかにみたてまつりけるあけ

ほのに

権大納言

こ、のへのかすみのまよりはなをみて

あはれこ、ろのみたれそめぬる

九十九番

左 宇治のみこかくれてのちつねにすみ

たまひける所をみて

右大将

たちよらんかけとたのみし、ぬかもと

むなしきとこになりけるかな

右 ふちつほの中将のきみに

権大納言

そてのうらになみよせかくるうつせかひ

むなしきからといつかなるへき

百番

左 かきりにおもひなりけるころ京

より母のゆめにみゆとておほつかな

きことをいひつかはしたりけるかへり

ことに

うきふね

のちにまたあひみんことをおもはなん

この世のやみにこ、ろまとはて

右 よをそむくとてかきをきける

権大納言

めのまへにさらぬわかれをみせしとて

よものあらしにまとひぬるかな

作者目録

左方 源氏

故院御製一首 寢覚

朱雀院御製一首 露宿

冷泉院御製一首 寢覚

六条院 廿七首

寢覚六 濱松七 参河二 朝倉三

袖湿一 心高四 取替二 露宿一

兵部卿親王四首 参川三 心高一

第八親王一首 寢覚一

前太政大臣一首 露宿一

玉鬘右大臣一首 参川一

右大臣六首 参川一 朝倉二

心高一 露宿一

柏木権大納言二首 参川一 海人劫藻一

右大将十首 寢覚二 袖湿四 取替一

末葉一 海人劫藻一

参議惟光朝臣一首 朝倉

明石入道一首 朝倉

北山上人一首 濱松

入道后宮三首 濱松 参川

二品内親王三首 寢覚一 朝倉一

心高一

二条尚侍三首 濱松二 取替一

玉鬘尚侍一首 袖湿

一条御息所一首 袖湿

前坊御息所三首 寢覚二 参川一

紫上二首 袖湿一 心高一

兵部卿親王上四首 寢覚二 袖湿一

末葉一

宇治親王姫君一首 参川

右大臣上一首 心高一

花散里上一首 露宿一

明石上二首 濱松一 朝倉一

桐壺更衣母一首 寢覚

夕顔君二首 参川二

故右衛門督上一首 取替

浮舟八首 寢覚一 濱松二 参川一

朝倉一 袖湿一 心高一

海人劫藻一

源典侍一首 寢覺

靱負命婦一首 朝倉

空蟬尼公二首 參川一 朝倉一

右方

寢覺廿首

院御製一首

關白一首

右大将三首

入道右衛門督一首

女院一首

中宮一首

寢覺上八首

姉上一首

民部卿上一首

女三宮中納言一首

女院新少将一首

御津濱松十五首

御製一首

中納言七首

大唐国宰相一首

河陽縣后二首

一大臣五君二首

大将姫君一首

吉野姫君一首

参河尔左介留十五首

權中納言七首

三位中将三首

右大臣上一首

太皇太后宮御匣殿一首

春宮宣旨一首

左衛門督舞妓一首

承香殿女御中納言一首

朝倉十三首

式部卿親王一首

關白内大臣三首

朝倉君八首

朝倉君母一首

袖奴良須十首

關白四首

院内親王二首

中納言君三首

承香殿小宰相一首

心高幾十首

御製四首

内大臣二首

春宮宣旨四首

取替波也六首

内大臣一首

權中納言二首

内大臣上一首

右大臣四君二首

露宿五首

御製一首

入道兵部卿親王二首

前齋宮一首

齋宮女別当一首

末葉露三首

右大臣一首

右大将一首

中納言典侍一首

海人菊藻三首

權大納言三首

這一卷為相卿御真蹟也

寛永十一曆

十二月上旬

古筆(琴山印)
了佐(花押)

〈参考文献〉

竹本元暉・久曾神昇『定家自筆本物語二百番歌合と研究』

(未刊国文資料刊行会 昭和三十年十二月)

樋口芳麻呂『王朝物語秀歌選(上)』(岩波書店 昭和六十二年十一月)

池田利夫・藤井隆『日本古典文学影印叢刊 物語二百番歌合

風葉和歌集桂切』(貴重本刊行会 昭和五十五年八月)

『誠堂書店創業百周年記念 古典籍善本展示即売会目録』

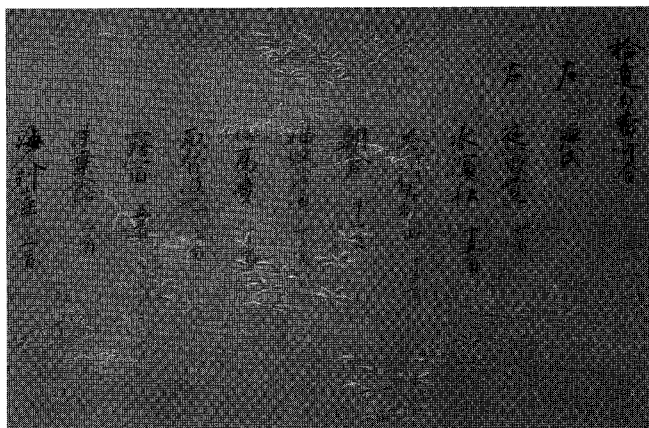
(一誠堂書店 平成十五年九月)

(付記)

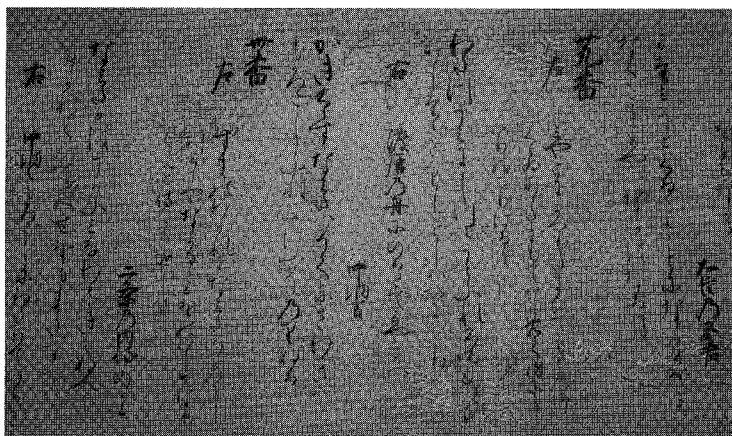
本稿は小島の指導のもとで土井が翻刻し、原稿化したものを、再度小島が校閲したものである。

(こじま・たかゆき 成城大学教授)

(どい・ともこ 成城大学大学院博士課程前期)



[上巻 巻頭 物語目録]



[本文]



[奥書]